

チョップスティックチョップ

「貢さんのご乱心だ！」

「嫡男が当主を斬り殺した、帯刀家はおしまいだ！」

使用人たちが恐怖の相で逃げ惑い、足袋のまま庭に駆け出す。ほどなくして障子に血しぶきが飛び、鹿威しが甲高い音を奏でる。

当主の断末魔は短い。

障子を開け放ち出て来たのは、道着に身を包んだ瘦身の青年。年の頃十五・六。

烏の濡れ羽色の総髪を結び上げた精悍な風貌は若き武士の貫禄を帯び、切れ長の一重瞼の奥には冴えた眼光が覗く。右手に下げた刀からは鮮血が滴り、畳に点々と赤を点じていた。

「ひっ、ひっ……」

青年の退室を目の当たりにし、現場に居合わせた女中が腰を抜かす。障子が傾いで外れた和室には累々と屍が折り重なり、鉄錆びた血臭が立ち込めていた。皆、青年に惨殺されたのだ。

女中は彼をよく知っていた。帯刀家の嫡男、貢。次期跡取りとして育てられた青年。

敵しい稽古にも音を上げず耐え抜き、十代半ばにして当主を凌ぐ技を身に付けた天才。

優しく実直な人柄で使用人にも慕われていた青年が、何故このような凶行に及んだのか。

春風に乗じ舞うひとひらの花卉が、涙袋に飛んだ返り血を隠すように頬に張り付く。

庭では桜の老木が今宵限りと狂い咲いていた。死出の旅路を祝うようにも見えた。

後ろで括った総髪が緩やかに靡き、爛漫と熟れた春の香りが鼻腔を刺す。

縁側に散りばめられた花びらを一瞥、刀の血を払い独りこちる。

「……これで見納めか」

嘆じる口調に虚無に宿る。嘗て恋した女と桜の下を歩いた思い出が甦り、胸の内に悔恨が根差す。

虚ろな視線の先に恋人の幻が立ち現れ、すぐかき消える。背後で死んでいる者どもはどうでもいい、取るに足らない存在だ。

帯刀貢は復讐を成した。

目的を遂げた今、娑婆には一切未練はない。

女中が震え声を発し、皺ばんだ手を擦り合わせて拝む。

「い、今見たことは誰にも申しません。だからどうか命だけはお助けを」

「貢さんが莞爾さんを、御父上を手にかけたなんてよそは漏らしません」

土下座で命乞いする使用人たちを見下ろし、毅然と命じる。

「顔を上げろ」

「はっ」

「官憲に連絡しろ」

「は？」

「それがお前たちの務めだ。俺は何処にも逃げぬ。此処にいる。もとより逃げ隠れはせぬ」

桜吹雪がすさぶ縁側に立ち尽くし、厳かに宣言する。

「俺とて武士の端くれ。父、ならびに門下生を手にかけて裁きは甘んじて受ける」

床に這い蹲った使用人が呆然とし、鞭打たれたように走り出す。女中はまだ平伏していた。

次第に遠のく後ろ姿を見送り、手庇を透かして桜を眺める。もうもどらない日々を懐かしむ横顔に乾いた感傷が浮かぶ。

帯刀貢は親殺しの凶悪犯として東京少年刑務所、通称東京

プリズンに送られた。

東京プリズンは嘗ての首都に存在する巨大な刑務所である。純血の日本人が東京プリズンに収監されるケースは非常に稀であり、世論に敏感な政府は厳しい報道管制を敷いた。

犯人以下関係者の名前は伏せられ、酸鼻を極めた事件の詳細は闇に葬られる。世間では仙台道場一門殺しと呼ばれた収監時の身体検査にあたった看守は、肛門をほじくられても顔色一ツ変えない貢に感心し、「まるで能面だな」と評した。

後悔はない。

呵責もない。

貢は父と門下生を殺した事を何ら悔いていない。連中には死ぬべき理由があった。仮に時を巻き戻せたとしてもきつと同じ事をする。

国の決定に異を唱えなかつたのは、復讐を果たしたのちの身の処し方を一切考えていなかつたから。

苗の仇さえ討てたなら、我が身がどうなろうと構わなかつた。

「なあお前、親殺しって本当か？」

お上の取り決めに従い東京プリズンに収監された眞は、同期の新入りと同じ房を割り当てられた。

「……それがどうした」

「お袋？ 親父？ どっちを殺った」

「父を」

「なんで？ ムカツいたから？」

「口数が多いな」

恋人の名譽のために沈黙を守る。ベッドに掛けた少年……

張は、面白そうに口角を吊り上げる。

「やるじゃん。日本人は平和ボケした腑抜けぞろいと思つてた」

「そうか」

「東京プリズンをめるぜ、俺は。手はじめにまずは東棟から。知ってるか、ここには東西南北四人のトップがいるんだ」

張が楽しげに指折り数えていく。

「西の道化、北の皇帝、南の隠者。で、最強と名高エのが東の王様。物凄い美形らしい、コイツを倒しててつべんとるんだ」

「一人でか」

「もちろんチームで挑む。聞いてないか、横浜の抗争。二十人殺した愚連隊、『麒麟児』のリーダー、それが俺」

張がベッドから腰を浮かし、両手を広げて眞に歩み寄る。

「同房の縁で仲間に入れてやろうか？ 東京プリズンで生き残りてエならツルむのが賢いぜ」

「徒党を組んで練り歩くのは肌に合わん」

誘いを断られたのが甚く心外な様子で、肩を竦めて開き直る。

「ハッ、一匹狼気取りか。クソ生意気な日本人め、ケツ掘られても知んねーぞ」

捨て台詞と共に去つてく張を一瞥だにせず、墨を磨つて写経に戻る。薄い壁の向こうでは絶えず騒音が響いていた。

先ほどから連続する鈍い音は、発狂した囚人が壁に頭突きをし自殺を図っているのか。

東京プリズンの囚人の大半は眞を遠巻きにしていた。出来心でちよつかいをかけるには素姓が剣呑すぎる。

「仙台道場一門殺しの犯人が収監されたって？」

「どれだよ」

「アレだよアレ」

「見た目は割と普通だな」

「親父と門下生斬り殺したんだとき、おつかねえ。現場は血の海」

「うへえ」

「ヤれるか」

「どっちの意味で」

「両方に決まってるあ」

東京プリズンの治安は極めて劣悪。看守による体罰の他、リンチやレイプが横行している。

初日の夜、貢の寝込みを襲った男がいた。新入り狩りが趣味の囚人だ。